

放送標準語の成立とその背景（２）

～戦中から戦後のラジオ時代～

● 最 上 勝 也

はじめに

今回は、日本で放送が始まってから昭和初期にいたる放送草創期に、日本放送協会が放送におけることばの標準化確立を目指して取り組んだ様々な施策について概観したが、本稿は、戦時体制が強まる昭和10年代から終戦を経て、テレビが登場するまでのラジオ時代における放送用語改善の軌跡をたどる。

第1章 戦中～戦後の時代と放送用語

昭和9年に部内に発足した「放送用語並発音改善調査委員会」は、昭和15年3月までに、だいたいの基本調査を終えて、6年3か月で解散している。この間に121回の会議を開き、その審議検討の成果は各種の刊行物となっている。主なものは、『アナウンサー用語集』『難読姓氏』『演劇外題要覧』などである。

一方、ニュース用語の調査研究を続けて行く必要があるとして、昭和15年に「ニュース用語調査委員会」が設けられた。外部委員には、新村出、金田一京助、東条操、岸田国士、土岐善磨氏らであった。この委員会はその名称が示すように、ニュース用語に重点を置いて審議した。そして、昭和15年10月に、放送ニュースの文章の規範を示す資料として、『放送ニュース編纂便覧』を刊行した。

これは、昭和10年2月に出された『ニュースの文体及び語法』と並んで、聴取者のあらゆる階層にとってわかりやすいニュースを書くための

指針を示すものであった。この書の冒頭には、「常に“語る文章”であることを年頭に置き、“書く文章”の弊に陥らない様に努めること」と書かれている。

一方、昭和16年12月8日の開戦により、委員会で審議する内容も、次第に時局を反映したものに変わっていった。ニュース文章も、わかりやすさや文法的正しさよりも、「簡潔で迫力があること」が望ましいとされ、語調を整えることに重点が置かれるようになった。

この「ニュース用語調査委員会」は昭和20年6月の会議を最後に、戦局の悪化にともなって業務を停止した。この間49回の会議を開いて『アナウンス読本』『日本語アクセント辞典』などを刊行している。

いったん業務を停止したこの委員会は、終戦を経て昭和21年4月に、「用語研究会」の名称で部内で再発足した。そして昭和21年6月から、新しく誕生した放送文化研究所で、この用語研究調査の業務を継承することになり、現在に至っている。

昭和21年11月には、国語審議会の建議に基づいて「当用漢字表」「現代かなづかい」が告示され、その後次第に各界でこれが採用され、実施された。このことは、国語史のうえからも、言語政策のうえからも、画期的なことだった。このような情勢を背景として、放送のことばの調査研究は再発足したのであった。この「用語研究会」が発足した当時の外部委員は土岐善磨、金田一京助、岩淵悦太郎の3氏である。

ところで、この時期の特徴は、終戦直後の「ことば」の混乱期とそれに続く反省期がある。敗戦はあらゆる既成の権威と価値に混乱をもたらした。その影響は、これまでの日本人の言語生活にも大きく投影した。戦時中の威勢の良い標語やいたずらに語勢の強い表現、軍隊用語や漢文調は急速に影をひそめていった。

代わって生硬な翻訳調や外来語がはんらんした。皇室敬語に対しては、いちはやく厳しい批判の目が向けられ、尊敬語、謙譲語、丁寧語など一

般の敬語の用法も、その基準を見失いがちであった。この時期の新しい合いことばは「ことばの民主化」であった。

大きな変動期に「ゆきすぎ」はつきものである。「ことばの乱れ」はようやく心ある人たちの注意を引くようになってきたが、新しいよりどころを示す説得力のある意見はまだ現れなかった。

当時、公の場で、ものを書き、ものを言わなければならない新聞やラジオの用語上の苦心と悩みは、その影響が大きいだけに深刻なものがあつた。

ちょうどこの時期—昭和21年4月に、激しい戦局のため一時中断されていたNHKの用語調査の仕事が復活したのである。

戦後再出発した「用語研究会」は、最初の仕事に、ニュース用語の平易化という問題を取り上げた。そして2年間にわたり、主にニュース原稿を議題として「耳で聞いてやさしく、わかりやすいニュース」を目標に研究を重ねた。その成果は日々のラジオニュースを聞いているだけではあまり目立たないが、5年前、10年前と時期を区切ってその原稿を比べてみると、構文上にも、用語上にも、著しい改善のあとがみられた。

第2章 ニュース文章の改善

2-1 ニュース文章の改善・向上をめざす

昭和15年9月に設置された「ニュース用語調査委員会」が最初に着手したのは、「放送ニュース編纂便覧」であった。この資料は、第一部文章編、第二部語彙編、別冊宮廷ニュース編で構成されている。

文章編のはじめに、ラジオニュースの「スタイル原則」が3項目示されているが、その最後の項目は、次のように書かれている。

「文体はすべて、我々一般国民の日常使っている談話体の表現形式を基準にし、常に『語る文章』であることを念頭に置き、『書く文章』の弊に陥らない様に努めることとする。」

また、語彙編の最初の項目、「むづかしい漢語の書換へ」にも、“「語る文章」としてのラヂオ・ニュース用語は、耳遠くむづかしい言語殊に難解な漢語であってはならないが、出来るだけ之等を分かりよく改めるのがよい”とある。

2-2 難解語の言い換え

戦時色が強まる中で、昭和17年2月に「難解語句の言換について」の調査報告がなされている。記録によれば、「政府関係の或る種の放送講演中における聴取上困難と認められる用語の摘録（総数約530）を行ったので、その過半数は言換がある程度まで出来るが、一部には、簡単に言換へられないものもある」として、次の三つに分類している。

第一類 大体に於いて言換可能なもの

（主な用例）

暗影（くらい影）

能ふ限り（出来る限り、出来るだけ）

胸襟を開く（うちあける、うち解ける）

熾烈化（はげしくなる、はげしくする）

方途に思を致し（方法を考え）

第二類 述語又は成語・慣用句として認むべきもの（この内には簡単に言換へ得るものもないではない）

（主な用例）

悪循環、運行能率、供給源、恒久方策、趨勢、破邪の剣

第三類 語句として使用不可能のもの乃至妥当でないもの（この内には前後の関係がなければ意義不明のもの、聴覚言語として全く成立し得ないもの等がある）

（主な用例）

授受注入、自我功利、睥睨、隆替の巖頭に立つ

第一類の語句は、言い換えが可能となっているのに対し、第二類のものは、言い換えなくてもよいとするものである。だが、「恒久方策」「趨勢」「破邪の剣」などは「語る文章」にふさわしいことばと言えるかどうか。また第三類のことばは、生硬な四字漢語が多く、現在からみれば耳のことばとして不適格なものばかりである。

語る文章にふさわしいことばを目指しながらも、平易化できないような情勢が強まってきたということであろう。

昭和16年12月8日に太平洋戦争が開戦。戦局が進むにしたがって、用語委員会で審議する議題は、戦時色が強まっていった。放送用語の平易化がこの時期、一時中断し、従来の「平易化」が「醇化」ということばに置き換えられることによって、一步後退せざるを得なかった時期でもあった。

昭和17年5月の委員会に提出された議題では、次のように記されている。

「用語の平易化は現在行はれつつあるところであるが、平易にして判りよくするばかりでなく、時として厳粛にして威厳を保持しなければならない場合があつて、例へば、『勇ましい』と和らげて言つてもよさそうなとき、『勇壮』といふ漢語を用ひて表現した方が、場合によっては、却つてしっくりすることもあるわけである。従つて、用語の平易化といふことは、時としてある程度犠牲にしてもよいことがあり、これは結局『語感』の問題に帰着すべきものと思われる。即ち、如何に平易な言葉遣であつても、語感がよくなければ何にもならないのである。」

当時の議題になった例文には、「我が軍は疾風枯葉を撒くが如き猛追劇を続けています」「薄暮の中泥寧膝を没する悪路峻険を強行突破して」などの例があり、いずれも、当時の戦況を伝える常とう的表現ばかりである。一応「大袈裟で陳腐な語の反復過剰はこれを避ける」という方針

もあったが、この頃の戦局は、ことばの「醇化」や威勢のいい「語感」のことばが求められており、「平易化」の精神を貫くほどの余裕はなかったと言える。

2-3 敵性語の言い換え

この時期で特筆すべきことに、英米語を中止とした「敵性語」の追放がある。昭和17年4月に「アナウンサー」を「放送員」、18年4月に「ニュース」を「報道」と言い換えたのを始め、それは一般外来語にまで及んだ。

例えば、アコーディオン（→手風琴）、アグレマン（→内諾）、アウトライン（→概要、要点、輪郭）、アドバルーン（→広告気球）、アーチ（→奉祝門、歓迎門）、アパート（→共同住宅）、プロセス（→手順、順序）など200項目について言い換えを行っている。中でも、18年3月には、日本野球連盟が用語の日本語化を決めたのを受けて、ストライク（→よし）、ボール（→だめ）、アウト（→それまで）など野球用語にまで及んだ。

もちろん、これは当時の国策に従ったものだが、それだけでなく、耳で聞いてわかりやすいことばを使うという放送用語の基本から考えられたものも多く、難解なカタカナ外来語がはんらんする現代のマスコミ用語を顧みても、この時期の言い換えは、放送用語の「平易化」という点からみれば、示唆するところが大きいといえる。

2-4 終戦末期——沖縄の地名も審議

昭和20年4月1日、アメリカ軍は、沖縄に上陸を開始し、県民を巻き込んだ決戦は、6月23日の日本軍最後の玉砕まで続く。昭和20年5月に開かれた委員会の記録には、次のように書かれている。

「最近戦局の進展に伴ひ報道中に難読の沖縄地名が相次いで現るも、

町村名以外に就ては未だその読み方を調査したることなく、この際字名、島名を含む約六百の地名の読み方を調査して置くことの必要を認め、沖縄出身の地理学者仲原善伸氏にその読み方の調査を依頼することを決定」

ニュース用語調査委員会は、この5月の委員会を最後に休止となった。

第3章 「日本語アクセント辞典」の刊行

3-1 初の「日本語アクセント辞典」(昭和18年版)

NHKが刊行している「日本語アクセント辞典」は、戦時中の昭和18年(1943)に第1回の編纂と刊行が行われ、以後平成10年(1998)までに5回出版されている。この辞典は、放送で使うことばのアクセントを広く集録し、アナウンサーをはじめ、放送現場で使用されているほか、共通語のアクセントの専門辞書としては他になく、共通語の標準的なアクセント辞典として朗読関係者や演劇などの分野でも広く利用されてきた。

注目すべきことは、戦時中にもかかわらず、この時期、第1回のアクセント辞典が刊行されたことである。昭和18年版は、収録語数がは約4万4000語で、当時の標準的な発音とアクセントを示したものだった。

当時、この種の特殊な、専門的辞典で市販されていたものは、語数が少なく、放送関係者はひさしく当辞典の刊行を待望していた。NHKでは、用語調査委員会がすでに昭和12年からその編集に着手していたが、標準アクセントの選定は予想以上に困難な作業であった。

興味深いことは、この辞典の刊行にあたり、購読者に対して、次のようなことを呼びかけていることである。

「本冊を検索して、そのアクセント表示を自己のアクセントと異なる

ことを見だし、又は本冊に二様以上のアクセント表示が施してあるのに対して、そのいずれかの一を採るべしとする読者は、その要旨を当協会内放送用語係にあてて示教せられんことを請ふ。その際、大体の年齢と生育地（併せて父母の生育地）をも書き添えて戴ければ幸甚である」（18年版「例言」から）。

当時の辞典編集関係者が、放送で使う標準アクセントの選定にあたって、いかに苦労したかが推察できる。

この18年版の果たした役割は大きく、戦時中にもかかわらず、各方面から反響があった。18年版の刊行について、当時の新聞（「東京新聞」昭和18年4月30日付）には、北村喜八氏の次のような論評が寄せられている。少し長いが引用する。

すこし古いことだが菊五郎の放送に「大陸」をタイリクとタにアクセントのある読み方があった。自分は棒読み（注：平板アクセント）だと思っていたので、最近刊行の『日本語アクセント辞典』で調べてみると両方が採用されている。自分は棒読みを採るが、東条首相をはじめ名優菊五郎までタにアクセントのある読み方だと、大勢はそれに決まらざるをえまい。高低アクセントの日本語では多少アクセントが違ってても意味伝達にさほど不便をきたさないし、この方面の研究も最近に属するのでまだ確たる基準が打ち立てられていない。しかし、国語として重要な一面であり、ことに日本語が大東亜圏の用語となりつつある今日、これの整理は国家的急務の一つであろう。そのためには先ず「法則」を発見し、それに合しない少数を例外とする方法を提唱したい。音声芸術家はこの問題に大きな役割をつとめているのを深く認識する必要がある。

放送事業者もこれに対し責任ある地位にあるだけに、常に研究されているようだが、最近『日本語アクセント辞典』の刊行をみたのは慶賀にたえない。この種の既刊二書よりは、正確のようだ。ただし、記号上、

もう少し細かい工夫が望ましい。たとえば、長音符を使用している以上、「太平洋」のヘイ、「名声」のメイは、それぞれヘー、メーとすべきであり、また、アクセントは発音と密接な関係をもつので、単音の無声化、梅、馬のウの標示がほしい。

話しことばの純化は、これからの国民としての教養の一つであろう。

一般の国語辞典とは異なり、放送のことばには、音声言語固有のアクセントや発音（鼻濁音、母音の無声化、二重母音の長音化など）が必要な言語要素である。現在からみれば、この種の辞典としては、いくつか不備な点があったことは否めないにせよ、放送で使う標準的なアクセントや発音を載せた辞典の刊行が、放送関係者や識者の間で待望されていたことが、当時の新聞記事からもうかがえる。

3-2 戦後の「日本語アクセント辞典」（昭和26年版）

終戦を境に、日本人の言語生活の面でも変革が大きく、新しい時代にふさわしいアクセント辞典が必要とされることになった。このため、昭和24年から部内に編集委員会を設置し検討を進めてきたが、26年3月に新版を刊行した。新版は、約4万7000語を収録し、小型で携帯に便利なことから、いわゆる「ポケット版」とも呼ばれた。この辞典は、アナウンサーはもとより、地方から上京して舞台役者や俳優を志す人たちから、ぼろぼろになるまで愛用されたという話もあるほど、多くの人から利用された。

この「まえがき」には、以下のような文言がある。

（前略）

「しかし、一口に標準アクセントの選定といっても、実際にはなかなかむずかしい仕事であることは、少しでも言葉の問題に関心をもつほどの人ならば想像に難くないところであろう。

各編集委員は、この仕事の成否が、この国の言語の運命に深く結びつ

いているという自覚をたえず持ち続けながら仕事を進めた。事実また委員会では、言葉とそのアクセントの単なる採集にではなく、むしろ、より洗練され純化されたアクセントを選ぶ出すことに非常な苦心と努力が払われた。

(中略)

しかし、ともかくもこの辞典は、一応、現在の標準アクセントの形態を記録したものとして、アナウンサーだけでなく、これから標準語を習得しようとする人々にとっても、一つの有力なよりどころとなるものと信じる。」

昭和10年3月に出された「放送用語の調査に関する一般方針」の「総則三」に、「共通用語は、現代の国語の大勢に順応して、大体、帝都の教養ある社会層において普通に用ひられる語彙・語法・発音・アクセント（イントネーションを含む）を基本とする」とあるが、実際にアクセント辞典に載せる標準アクセントがどのような基準のもとにどのような審議過程を経て採用されたのか、当時の資料が乏しく定かでない。アクセントの正否については、編集委員個々の持つ属人的なアクセント型に依拠する傾向があり、「全国の聴取者に広く受け入れられる、放送での標準アクセント」（現在の共通語アクセント）という視点から選択されたかどうか定かでない。

しかし、その後に刊行されたアクセント辞典（昭和41年以降）と比較すると、前述の2冊のアクセント辞典は、伝統的な東京語アクセントを土台としたアクセント型を採用した傾向があり、アクセントのゆれ（一つの語に複数のアクセントがあるもの）もあまり認めていない。その意味では、現在からみると、規範性の高かったアクセント辞典と特徴づけることができる。

第4章 アナウンサーたちの模索

4-1 初期の「絶叫調」から「淡々調」「話しかけ調」へ

昭和9年から組織的なアナウンサーの養成が行われて以来、『アナウンサー用語集』『基本アナウンス』『アナウンス読本』などの部内資料が続々と刊行された。

放送草創期では、マイクロホンの感度が悪く、大きな声で叫ばなければならなかったうえ、マイクの前に正しく向かって喋らないと音声が見事に伝わりなかった。また、気持ちの上からも、遠いところでラジオを聴いてもらうには、「大きな声」を張り上げないと伝わっていかないと考えていた時代であった。それは、いわゆる「絶叫調」と言われたアナウンスである。

しかし、次第にマイクロホンなどの機器の性能がよくなるにつれ、いわゆる「淡々調」といわれるアナウンスが主流を占めるようになってきた。昭和16年に作られたアナウンサー養成用のテキスト『アナウンス読本』は、わずか78ページの小冊子だが、第一部は発音基礎、第二部は応用実習編の2部で構成されていた。内容は、基本発音から始まって、気象通報、ニュース、経済市況、実況など多岐にわたっている。

当時のアナウンスがどんなものであったかを知るうえで、参考までにいくつかの実例を紹介する。

例えば、「第三課 ニュース」の項では、最初に宮廷ニュースがある。

「天皇陛下に於かせられましては、けふ正午から宮中竹の間に出御、北白川宮殿下にも御臨席あらせられ、このほど動乱のヨーロッパから帰朝した前ポーランド駐在特命全権大使を召され、湯浅内大臣、松平宮内大臣、百武侍従長、蓮沼武官長、その他側近等も召されて、御慰労の思召により御餐の御陪食仰せつけられました。」

現在では使われていない特殊な宮廷敬語と、難語、長いセンテンスで放送されていたことがわかる。

次に「第十四課 実況」では、満州国皇帝が横浜港に到着したときの模様を、こんなふうに乗せている。

「遙かに見渡す横浜港、6月の陽光は縮緬皺に屈折する海面に反射して、迎へまつる御召鑑の艦影、紫にゆらめく。紺碧の空の下、青畳敷き参らせて、今し、満州国皇帝閣下の御召艇を御待ち申し上げております。皇国、紀元の昔を忍ぶゆかりの御召鑑『日向』はその威容をしづかに停めて、メインマストには、先程まで掲げられてありました五色の満州国軍艦に代わって、いよいよ我が軍艦旗するするとマスト高く掲げられ、夏風に爽涼とはためき、白き鴟の群れは斜めに水面に飛びかひ——。」

これが昭和16年のアナウンサーの教科書に載ったアナウンスであった。

『アナウンス読本』と並行して書かれたものに『特輯アナウンス副読本』があったが、その中に「話しかけ調」ということばが出てくる。その頃、考えられていた「話しかけ調」とはどのようなものであったのか、その記述から紹介する。

「我々のニュースに於ける表現方法は、読み方といへば、それは『伝達者の主観を交へない、淡々として、而も上品な読み方』ということが出来る。(中略)過去のニュースの読み方が朗読調とするならば、現在我々の用ひている方法は『話しかけ調』ということが出来る。(中略)何故なら我々がニュースを伝達する対象である聴取者は、各家庭を一単位として無数に分散したものから成り立っている。従って我々伝達者は常に各家庭を対象の単位として考へなければならない。そのためには、各家庭の日々の生活に、和やかにとけこむ様なごく自然のアナウンスが

望ましい。」

一方で、ニュースの読み方については、当時アナウンスの部内で「淡々調」ということがいわれていた。これについて雑誌「放送」（昭和15年）で、アナウンサーの高橋博は、次のように述べている。

「ニュースの内容の把握ということは重要であるが、その内容に没入し、溺れることは絶対に避けねばならぬ。万一アナウンサーがニュースの内容に溺れたら、それは決して的確なる把握ではなく、そこに生まれるアナウンスは、最も嫌悪すべき、卑屈なるものとなるに違いない。戦況ニュースを如何にも己が戦場にある勇士であるかのごとく読んだとしたらそれは、アナウンサーの本来の姿を失ったことになる。だからといって戦況ニュースを静かに読めといっているのではない。（中略）アナウンサーたる自分としては、より自然な、より率直な雰囲気の中に『放送ニュースアナウンス』を打ち立てたいと希望している。」

4-2 戦時下の「雄叫び調」

昭和16年、『アナウンス読本』が刊行され、「話しかけ調」「淡々調」などニュースを読む技術論や方法論の検討がされ始めたとき、太平洋戦争が勃発したのである。

軍による厳しい言論統制の下で、華々しい戦果を報じ、国家の権威を誇示し、国民の士気を高揚するためのアナウンスが要求された。それには「話しかけ調」や「淡々調」といったアナウンスでは物足りなくなる。激しい口調のいわゆる「雄叫び調」があつという間に時代の本流になるのである。

開戦の臨時ニュースを担当した館野守男は、「戦時放送とアナウンス」（昭和17年4月）の中で、このように述べている。

「アナウンサーが『宣伝者』として生まれ変わることが要求された。

宣伝者たるには、第一に情熱の人でなければならない。アナウンスは人に訴え人を説得しようという劇しい強調の精神を持たねばならない。——『淡々調』の地盤であった聴取者の関心関係の多様性は、今や失われたのである。情熱をこめたアナウンス、国民の関心の方向を強調するアナウンスこそ、かかる情勢に適応する最も良きアナウンスと言われるべきである。」

一方、この「雄叫び調」については、かなり醒めた目で見ていたアナウンサーもかなりいた。その一人、川添照雄は、次のように語っている。

「情熱というものは危険な代物である。ともすれば独りよがりの興奮に墮するからである。もちろん、『宣伝者の情熱』を説いている人は、そのことを戒めている。『大声を張り上げるだけが宣伝者ではない』と。声を殺して、親しみ深く話しかける宣伝者もあるのである。——ともあれ、アナウンス理論というものは大切であるに違いはないが、理論のワクのみを性急に形造って、作品としてのアナウンスをその中にハメ込ませるとしたら、これは本末転倒といわねばならない」（「戦時放送とアナウンサー」昭和18年7月）

「雄叫び調」を前提にした、漢語や文語表現が入り交じった文体と難解なニュース表現の登場は、放送開始以来アナウンサーが模索し、目標としてきた「平易でわかりやすい耳のことば」の建設にとっては、一時、時代を逆戻りさせることになった。それは、戦時下という異常な時代背景の中で生まれたものであった。

第5章 戦後の社会状況と放送のことば

5-1 「ことばの民主化」と放送のことば

戦後、社会状況の移り変わりとともに、放送の中でのことばや表現にも大きな変化が訪れたが、それを促した要素として、まず、技術の進歩

による小型録音機の発達と民間放送の誕生が挙げられる。

小型録音機が急速に普及したのは昭和20年代後半からである。それによってマイクロフォンが全国の農村や漁村などにまで入り込むようになり、多くの人々のことばを電波に載せることができるようになった。

戦前の放送は、話を主体とする番組では、落語、講談などの芸能、アナウンサーによるニュースや気象通報、経済市況などの告知放送、そして一人の話し手による講演形式の番組が多かった。

例えば、昭和15年4月1か月間の番組を見てみると、いわゆる報道、教養番組とされるものは約300本である。そのほとんどは、修養講座、時局解説、家庭・婦人・児童・職業人向けなどの講演形式の番組である。また、講演者の内訳は、学者、教師の117人を筆頭に、役人、文化人、医師、軍人、大臣、宗教人の順で、これらの人々が講演者の8割を占めている。軍人や大臣が多いのは、時局の反映だと思われる。

では、戦後の昭和25年4月の番組ではどうか。ここでは、「朝の訪問」（対談）「主婦日記」（インタビュー）「街頭録音」それに娯楽番組だが「二十の扉」「とんち教室」などが並んでいて、一人の話し手による講演よりは、複数の人々が出演する多彩な形式の番組が増えてきており、また出演者の層も広がってきている。

特に昭和21年6月から始まった「街頭録音」は、街角に出たマイクの前で、人々が普段のことばで話すという番組の先駆けであった。これに拍車をかけたのが、肩掛け録音機の登場である。通称「デンスケ」と呼ばれたこの小型録音機は昭和20年代後半から30年代にかけて急速に普及してゆき、番組制作者やアナウンサーが肩にかけて全国どこへでも出かけて行くことが出来るようになった。

これによって今までマイクの前に立つことのなかった人々までもが、放送に登場するようになった。そこで話されることばは、標準語だけでなく、地域のことばであり、職場の中のことばや学校内でのことば、家

庭内でのことばであった。この結果、放送で話されることばは、戦前の一部エリート層の話す規範化されたことばから、一般国民が日常的に話す言語に変わってゆくのである。

5－2 民間放送の登場

放送の中のことばや表現に変化をもたらした要素の二つ目は、民間放送の誕生である。

昭和26年9月1日、名古屋の中部日本放送と大阪の新日本放送が、広告放送の第一声を放った。今まで広告宣伝のなかった放送の中に、コマーシャル（CM）が入るようになり、聴取者の興味をそそった。CMも初期のものは朗読調、美文調であったが、次第に日常の話しことばに近いスタイルへと変化してゆき、やがては従来の放送では聞かれなかったような、かなり大胆な言葉まで飛び出してきて、子供や若者たちの間で話題にされるようになった。当時、話題になったCMを参考までに紹介する。

「おめえ、へそねえじゃねえか、なんとか言ったらどうだい」

「お世話になります」「なんのお世話もなりたかない」

「かあちゃん、一杯、やっか」「いいと思うよ」

「これはえらいことですよ」

CMのコピーには、瞬時にして聴取者の耳を引き付けることばの喚起性や惹起性が要求される。そのため、折り目正しい日本語をあえて崩す破格性も表現手段の一つであり、言語の鋭い感覚性が問われることにもなる。民間放送の登場は、放送の日本語に新たな多様性をもたらすものであった。

5－3 戦後の言い換え

昭和20年代から30年代にかけては、放送番組が多様化するとともに、一般社会を反映して外来語が増加したこと、また専門番組の増加に伴っ

て放送での専門用語の扱いが大きな問題になってきた。

ニュース用語については、放送局側のニュースの自主取材の体制が整備されたために、戦前の通信社原稿に見られたような、長いセンテンス、文語調・古風な表現、難解な漢語表現などは姿を消したが、それでも日本語の中で大きな部分を占める漢語をいかに解きほぐして、日常的な話しことばに言い換えるか、という立場で放送用語の改善が進められた。そのような背景の下に、昭和28年に『難語言い換え集』が作られた。ここで採り上げられた項目は、用例も含めて5200項目にも及んでいる。

この『難語言い換え集』の特徴は、「まえがき」で、「この本では、単語の言い換えを主にしましたが、実際には単語だけ言いかえても不十分ですし、また相当無理ができてくる場合が少なくありません。単語をもとの品詞に言いかえるだけでなく、名詞を動詞に、名詞を句に、さらに文章全体まで言い換えたり、一つの文章をいくつかの文章にわけて書くとわかりやすくなるのがよくあります」と記されているように、句単位、文章単位の言い換えを重視したことである。

例えば、「伝染病の感染経路を調べる」というニュース文章があるが、『難語言い換え集』では、「感染」「経路」の単語レベルでは、次のような和語系の言い換えを載せている。

感染——うつる・かぶれる・そまる

経路——みちすじ・みち・通りみち

従って、上記の文章を単語レベルで言い換えると「伝染病のうつってきたみちすじを調べる」などとなり、こなれない表現になってしまう。そこで「伝染病がどこからうつってきたかを調べる」という用例で、原文の文章構成や名詞・動詞などの品詞にとらわれない言い換えを載せている。

このようなニュース用語の改善が、戦後しばらくの間続くが、次回からは、いよいよテレビ時代に入って、放送番組と出演者が多様化し、放

送のことばも限りなく日常言語に近づいてゆく中で、放送標準語の改善と変化の軌跡を辿っていききたい。

【参考文献】

- ・ NHK アナウンサー史編集委員会『アナウンサーたちの70年』(講談社、平成4年)
- ・ 文化庁「ことば」シリーズ12『話しことば』(昭和55年)
- ・ 浅井真慧『放送用語の調査研究の変遷』(NHK 放送文化調査研究年報 No.34, 平成元年)
- ・ 最上勝也「放送用語言い換えの系譜」(月刊『言語』Vol.29, No.10、大修館)